

佐野病院 クリスマス会

日時：平成 24 年 12 月 15 日 (土) 14:00 ~ 15:00

場所：佐野病院 1 階 総合受付前

参加費：無料 (どなたでも参加可能)

プログラム：

【第 1 部】 チーム対抗輪投げ大会

【第 2 部】 アロハファミリーによるフラダンス&ウクレレ演奏



12月15日(土)14時から、佐野病院の1階総合受付前にて「クリスマス会」が開催されました。仮装した職員が迎える中、たくさんの患者様、家族の皆様など、総勢80名近い方にご参加いただき、にぎやかな催しとなりました。中には、診察のない午後からの開催だったにも関わらず、わざわざクリスマス会のためだけにお越しくださった通院患者様もいらっしゃいました。

第1部は、チーム対抗の輪投げ大会。当日選ばれた各チーム代表者が、点数の書かれたボードに輪を投げ、点数の高かった上位チームには景品が贈呈されました。予定より早く終わってしまうというハプニングもありましたが、参加した皆さんは、当院からのささやかなクリスマスプレゼントに、笑顔がこぼれていました。



第2部は、ボランティアで活動されている「アロハファミリー」の皆様による、フラダンス&ウクレレ演奏のステージです。今回は、特別にクリスマスバージョンのアロハ音楽を演奏していただき、ハワイの暖かさが感じられるクリスマスとなりました。

癒しの音楽に合わせて一番盛り上がりつつあったのは当院の職員ではありませんが、中には声を出して歌っておられる患者様や手拍子をされる方も！病院の中で、少しでも笑顔になれるひとときを、患者様にお届けできたことを、大変うれしく思います。

たくさんの方のご参加、また、ご協力のお陰で、とても素敵なクリスマス会となりました。ご参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。



SANO HOSPITAL NEWS

— 特別対談 —

地域でのがん診療のあり方と 佐野病院の役割

地域完結型のがん診療をめざして、成長を続ける佐野病院。

2006年、最新設備と患者様の居心地の良さを追求した「消化器センター」を新設し、地域の民間病院で高度ながん診療を行うという、いわば、これまでの民間病院のイメージを覆すチャレンジを行ってきた。このチャレンジの原動力となっているのが、今回対談をお願いした、小高雅人氏と蓮池典明氏である。主に腹腔鏡を使った高度ながん手術を担当する小高氏と、内視鏡診断・治療と抗がん剤治療・緩和ケアの分野を引っ張る蓮池氏。

今回は特別対談として、佐野病院の高度医療を支えるキーマンであるお二人に、これまでの取り組みについて、そして今後目指す方向性について、大いに語り合っていました。



地域医療連携室室長
消化器センター医長
蓮池典明



消化器センター長
小高雅人



各交通機関のご紹介

- JR舞子駅・山陽電車 舞子公園駅から
53・54系統 学園都市駅行 西岡橋停留所下車 徒歩5分
- 神戸市営地下鉄 学園都市駅から
53・54系統 舞子駅行 西岡橋停留所下車 徒歩5分
- JR垂水駅・山陽電車 山陽垂水駅から
2系統清水が丘行 清水が丘停留所下車



医療法人 薫風会 佐野病院

〒655-0031 神戸市垂水区清水が丘2-5-1
TEL: 078-785-1000 FAX: 078-785-0077
編集・発行：地域医療連携室

診療科目：内科、消化器センター（消化器内科・消化器外科・内視鏡治療・化学療法）、緩和ケア支援部門、整形外科、リハビリテーション科、婦人科、放射線科

URL : <http://www.sano-hospital.or.jp/>

理念

医療 地域医療への貢献 患者さんの立場に立った医療
経 健全な経営 着実に前向きな病院の発展
倫 悔いなき職場 生活と人格の向上

方針

1. 私達は、患者さんの病を癒し、苦しみを和らげ、延命に努めることを誓います。
2. 私達は、患者さんの人格・人権を尊重し、合意を旨とし、信頼に応えることを誓います。
3. 私達は、法を遵守し、過誤を防ぎ、生涯、医の知識と技術の研鑽に励むことを誓います。
4. 私達は、職員相互の職分を理解し、尊敬し、協力して患者さんの医療に当たることを誓います。

ドクターから見た理想のがん診療とは？

2006年からの再スタート

—佐野病院は、2006年にそれまでの方針を一転し、先端医療を担う急性期病院へと舵を切ったわけですが、方向転換には、いろいろと苦労があったのではないのでしょうか？

小高 佐野病院には長い歴史があり、内科と産科を中心として発展してきた経緯がありますので、急に「最先端のがん診療が可能です」といっても誰も知らないし、また、信じられなかったと思います。当時は今にもまして、がん診療＝大病院というのが、世間一般の常識となっていましたから。まずは、こんな地方の民間病院でも、最先端医療が可能だという認識をもってもらうことに、大変苦労しました。

蓮池 そういう意味では、世界から認められている佐野寧院長の内視鏡技術と小高先生の手術のクオリティの高さ、そして、多くの内視鏡検査や手術件数をこなされた実績こそが、「佐野病院＝最先端のがん診療」という知名度と信頼度を押し上げていったように感じます。

小高 がんは、多くの人が患う大変身近な病気になってきたにもかかわらず、治療できるのは大病院だけというバランスの悪い構図を、何とか変えたいという気持ちで日々取り組んでいます。

蓮池 身近な地域の中に、がん診療を行う病院が必要なのは明白ですからね。がん患者は年々増えるのに、大都市の大きな病院でしか治療ができなければ、患者様がおのずと溢れてしまいます。

小高 がん診療を地域の病院が担うことは、社会的ニーズだと感じていました。当院がそのパイオニアとしての役割を果たしているというのが、佐野院長はじめ、私たちの大きな目標でしたね。

—佐野病院と大病院のがん診療を比べた時、一番の違いはどのような点でしょうか？

小高 まずはスピードですね。当院では、手術が必要だと判断した場合は、2週間以内の実施が基本です。このスピード感は、大病院には無いものだと思います。

蓮池 患者様のニーズに合わせた治療も、その一つだと思います。スタッフ間の連携を密に行い、常に患者様の情報を共有し、一人ひとりに合わせて治療方法を柔軟に変えていけることも、大病院にはない良さではないでしょうか。

小高 また、実質2名の外科医で手術を担当していますので、1人あたりの手術処置件数が必然的に多くなります。消化器分野では「単孔式腹腔鏡下手術（SILS）」や「肛門温存手術」などの最先端医療に取り組んでいますが、これらも、手術数をこなすことで経験値が上がり、技術も自然にレベルアップしています。年間にこれだけの手術件数をこなしているドクターは、大病院でもそう多くないと思います。



蓮池 大きな病院は、規模や名前だけで患者様の納得や安心感を得ることができず。その点、我々のような小さい病院は、

結果で信頼を得るしかありません。結果が伴わないようであれば、患者様は当然大病院での治療を希望されるようになりますので、少しでも質の高い治療とケアで、患者様の信認を得ていくしかありません。

小高 放射線治療など特別な機器を要する治療、若手医師の教育、基礎的な研究施設としての役割などは、確かに大病院でなければできません。ですが、実際のがん診療や臨床研究は、地域の病院でも十分可能ですし、そうなるべきだと思います。今後は、大病院と地方の民間病院がきちんと役割分担をしていくことが、不可欠だと思います。

蓮池 消化器センター開設以来、お陰様で、他施設からの紹介も年々増えています。これは、開業医の先生方からの当院に対する期待の表れであると身が引き締まる思いです。ただ、まだまだ発展途上で、満足できるレベルには達していませんので、スタッフが一致団結して成長を続けることが求められていると思います。

地域病院としての役割

—今後、がん診療は、どのような形になっていくのが理想だとお考えでしょうか？

小高 今までのがん診療は、「がんを治す」ことに心が「向きがちで、患者様の「つらさ」に対して、十分な対応ができていなかったように思います。しかし、最近では、患者様の「療養生活の質」を向上させることが、「がんを治す」と同じように大切と考えられるようになってきました。その流れをいち早く汲み取り、当院では、どのようなケアを行えば、患者様が療養生活を不安なく送れるのか？ということを中心に考えています。

蓮池 当院の特徴は、専門である消化器がん診療において、診断から手術、化学療法さらに緩和治療まで、全てを当院のみで完遂できることです。個人的にはそれが当たり前だと思いますが、多くの大病院は、診断や手術、化学療法の初期段階までは積極的で、状態が悪くなってくると近くの病院に転院させるケースが多いです。もち

ろん、患者様が殺到する大病院側の事情もあるでしょうが、患者様やご家族の多くは、状態が悪くなったときこそ、大病院が安心だと思っているわけですから、その時点で転院を勧められる失望感、計り知れないでしょう。この現象は個々の医療機関の問題ではなく、社会問題だと思います。その点、当院では、小高先生が外科治療に引き続き、化学療法も担当されるため、病態を一番理解している人間が抗がん剤治療にも関わることになります。そのため、非常に柔軟な対応が可能というわけです。



小高 特に大腸がんの場合は、抗がん剤治療によって外科的手術が可能ならレベルまで症状が改善することがあります。そのような場合でも、いち早く対処できるため、外科的治療と抗がん剤治療を一貫して担当することは、治療においてもケアの観点からも安心感があると思います。

蓮池 内視鏡治療や外科手術は、担当する人間の「技術力」が重視されると思いますが、抗がん剤治療は、いわゆる保険承認された「薬」ですから、効果に関しては処方医による個人差はないと思います。また、副作用の対処も含め、簡便に行える工夫がなされていますので、極端に言えば、どの病院でも同様の治療が可能です。だとすれば、地元の病院で治療を行い、患者様のストレスを軽減するべきだと思います。

小高 その通りですね。加えて、手術を担当したドクターが、抗がん剤治療も担当してくれるということになると、患者様の安心感が違ってくると思います。

蓮池 一つの病院ができることには、当然限界があります。ですから、今後は、標準的

ながん診療は地域の病院が担い、対応が難しいケースを大病院がサポートするという、本来の協働体制に戻る必要があるのではないのでしょうか。さらに、在宅療養を行うドクターともコミュニケーションをしっかりと築くことで、地域一体となつてのがん診療をめざしていきたいですね。

小高 地域の病院がそれぞれの特徴を活かし、役割分担しながら、一体となつてがんという病気に向き合うことが理想でしょうね。そこを積極的に進めてくださる蓮池先生の力は、非常に大きいと思っています。

新たな医療への貢献

—これからの佐野病院は、地域のがん診療の核になるという目標があるわけですね。

小高 その通りです。加えて昨年は、国立がんセンターが中心となり、がんに対する標準治療の確立と進歩を目的として研究活動を行うJCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）の参加施設に選んでいただき、臨床試験によって有効な治療法を開発するという新たな取り組みも始まっています。

蓮池 昨年9月に消化器内視鏡グループ、10月に大腸がんグループに参加し、現在10を超える臨床試験に取り組んでいます。参加しているのは、名だたる地域のがん拠点病院ばかりですので、当院のような病院が参加するのは、異例だと言えます。地域の民間病院にも、国内最先端の臨床試験に参加するチャンスが生まれたのは画期的ですね。

小高 ただし、私たちがしっかり結果を出さなければ、今後、小さな民間病院が臨床試験に参加するチャンスが無くなる可能性もあるため、責任は重いと感じています。

蓮池 確かにそうですね。でも、小高先生は、各種臨床試験の登録実績が国内有数です。実際に評価も高い。こういった取り組みから、新たながん診療の道が開かれることになれば、大変喜ばしいですね。

小高 臨床試験に参加することで、当院の治療レベルの高さを証明し、少しでも患者様に安心感を与えることができれば、そ

の意味でも大きな意義があるのではないのでしょうか。

患者様に選ばれる病院となるために

—これからは、患者が病院を選ぶ時代だとわけています。患者様に選ばれる病院となるために、必要なことは何だと思われますか？

小高 がん診療に関しては、健診から緩和ケアまで、トータルで患者様を支えることができる病院が、これからは必要となつてくるでしょう。

蓮池 結局は、患者様に対する「思いやりと責任」ではないでしょうか。外科的治療だけ行い、後はホスピスなどに任せていては、患者様に対して本当に責任を持つことはできません。時代に逆行することもできません。医療者が求めている医療の細分化に対して、患者側の意識ができていない印象を強く持っています。つらい現実も含めて、最後まで患者様と向き合い、治療を全うする。そんな病院がこれから求められると思います。

小高 そのために、当院では今後も、高度な内視鏡治療と外科治療。そして、患者様の気持ちに寄り添ったさまざまなケア。このがん診療の2つの柱を共に成長させながら、地域のがん専門病院のパイオニアとして、地域医療の発展に貢献していきたいと思っています。

